

脱プラスチックへの挑戦

堅達京子+NHK BS1 スペシャル取材班

序章「なぜストローは紙になったのか」

- ・ 2018年G7サミット「海洋プラスチック憲章」
- ・ 2050年には海中プラスチック量が魚を超える
- ・ プラスチック問題の本質～地球温暖化・気候変動との関係
- ・ プラスチック汚染の現実～プラスチックごみの回収～リサイクルビジネス
- ・ 使い捨て経済から循環経済へ、プラスチック文明からの脱却

課題：

- ・ プラストローの全廃、レジ袋の紙化
- ・ マイクロプラスチック問題あり

第一章「海のプラスチックごみを回収する」

- ・ 世界のプラスチック生産量は、年間4億トン。そのうち、世界の海には毎年910万トンものプラスチックごみが流出。(500mlのPETボトル5000億本に相当)
- ・ このまま増え続ければ、海洋のプラスチックごみは、2050年には魚の量を超える。
- ・ 5mm以下のプラスチック、マイクロプラスチックの問題が深刻化。空気や水、プランクトン、小魚、鳥、そして人間の体内からの検出されている。
- ・ マイクロプラスチックの人体への影響は未知数。だが今後、プラスチックの量が増えると、食品連鎖によって有害物質が濃縮され、影響が出る懸念がある。
- ・ 石油使用量の約8%は、プラスチックの原料を作るために使われ、さらに海洋プラスチックごみからはメタンガスなど温室効果ガスが出ている。
- ・ 世界各地の海や河川でプラごみの回収への試みが始まっている。(下の写真参照)



第二章「一步先を行く世界の取り組み」

- ・ フランスでは国民の88%が使い捨てプラスチックの規制に賛成。ニューヨーク市では発泡プラスチック容器に最大1000ドルの罰金。レジ袋に関しては何らかの規制をしている国は120か国以上。
- ・ 温暖化の原因となる化石燃料からのダイベスト(投資撤退)だけではなく、プラスチックからのダイベストも視野に。
- ・ 世界の400以上の大企業は「2025年までにプラスチックごみをなくす」共同宣言に署名。ビジネ

- スチャンスとしても捉えており、脱プラに向けた競争が始まった。
- ・ 2018年1月1日、中国政府はプラスチックごみの輸入を禁止。日本のプラスチックリサイクルは大きな転機を迎えた。
 - ・ 日本の動きは遅く、「海洋プラスチック憲章」に署名しなかったが、オリンピックの年にレジ袋の有料化がスタート。
 - ・ EUは「循環経済」の実現に向けて、野心的な戦略を強化、グローバルルール・メイキングの主導権を握ろうとしている。
 - ・ 日本企業の技術力には、世界が注目している。



(上) ケミカルリサイクル技術を世界に売り込む日本環境設計の高尾正樹社長。ペットボトルや洗濯料など廃プラスチックをリサイクルする世界に誇れる技術力を持つ
 (下) 日本環境設計の岩元美智彦会長(右端)は、映画「バックトゥーザ・フューチャー」に登場した、ごみを燃料にする車「デロリアン」を入手。古きからバイオエタノールを作る技術を開発し、実際に走らせることに成功した

第三章「プラスチックを検出する地質時代に生きて」

- ・ 現在は「人新世(アントロポセン)」と呼ばれる地質年代であり、プラスチックが特徴となるであろう。
- ・ SDGsのウェディングケーキが示すように、持続可能な発展のためには地球環境がすべての目標を支える根幹になっている。
- ・ プラネタリー・バウンダリー(地球の限界)の9つの領域のうち、すでに「気候変動」「生物多様性」「土地利用」と、リンや窒素などの「化学物質の循環」の4つの分野でリスクが増大、限界値を超えている。
- ・ 石炭火力発電所は「座礁資産」となる可能性が高い。
- ・ 西日本豪雨のあった2018年の保険金支払い額は1,7兆円。2019年の台風等による支払い総額は2兆円を超える見込み。
- ・ 2018年の自然災害による世界の経済損失は、約25兆円に上った。
- ・ 今後5年以内に気候変動が事業に影響を与える累計損失額は1兆ドルと推計される一方で、気候変動に適応する利益の総額は2兆ドルを超えると見られる。
- ・ 地球はすでに気候非常事態にあり、このままでは「ティッピングポイント」を超える可能性が高い。
- ・ 手遅れにしないためには、科学者の声に耳を傾ける必要がある。

第四章「未来への提言・・世界の英知からのメッセージ」

- ・ 産業革命前から2°C前後の気温上昇で、ホットハウス・アース(灼熱地球)へのスイッチを押してしまう危険性がある。
- ・ いったんスイッチが入ると、氷床の融解が止まらなくなり、温暖化のドミノ倒しが起きてします。10メートル以上の海面上昇など、人類文明崩壊のリスクに直面する。

- ・早ければ2030年にも、防衛ラインである1.5℃まで上昇。これを食い止めるには、2030年までに、二酸化炭素の排出量を半減する必要がある。この10年が正念場となる。
- ・従来の使い捨て経済は行き詰まり、破綻している。プラスチックの使用を劇的に削減し、循環経済に転換しない限り、未来はない。
- ・地球の限界に気づくのは、越えてしまった時。今すぐ始めて、ぎりぎり間に合う時間しかない。
- ・4つのゼロ(廃棄物のゼロ産業、ゼロエネルギーの建物、排出量ゼロ交通、炭素ゼロ発電)を目指すべき。
- ・循環経済はビジネスチャンス。次世代の巨大なグローバル産業で先頭に立つ国が、世界一クリーンで豊かになる。

第五章「正念場の10年をどう生きるか」

- ・2030年の私と地球
- ・地球温暖化4度上昇の惨劇
- ・時間がないという科学者たちの懸念
- ・パラダイムシフトを日本のチャンスに！
- ・カギを握る人材育成
- ・一人一人の市民に出来ること
 - ①ライフスタイルを見直す
 - ②”循環経済”全体を意識する
 - ③”脱”をポジティブに捉える
 - ④SNSを活用して声を上げよう
 - ⑤グreta世代とともに「ソーシャル・ティッピングポイント」へ

あとがきにかえて

- ・大量生産、大量消費の生活が、地球環境の劣化と生物多様性の減少
- ・自然災害という天災と人類が人災を生み出す
- ・人類が叡智を結集して、社会の大転換を起す
- ・新しい経済、社会システムへの変化を加速する
- ・気候変動より強い気候危機や気候非常事態！



文責 藤